

27年度版教科書つれづれ 12 「スイミー」(光村図書・小学2年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「スイミー」は光村図書・小学2年(上)の物語である。2年生前半の目玉教材ともいえる。レオ＝レオニ作・絵、谷川俊太郎訳で、光村図書の代表教材の一つである。もちろん、文章の変更などあるはずもない。では、どこが変わったか。それは絵である。

と言っても、絵もレオ＝レオニが描いているのだから、絵そのものが変わっているわけではない。変わっているのは、絵の向きなのである。

23年度版(以下旧版)は、スイミーが左向きになるように印刷されている。したがって、まぐろも、スイミーが仲間と作った「大きな魚」も左向きになっている。それに対し27年度版(以下新版)では、スイミーの向きがすべて右向きになっている。

「スイミー」は絵本である。それももともとが英語の絵本であるため、「左開き(左側へ本の扉が開く形)」になっている。ページの進行は左から右へと進むことになる。したがって、読者は左から右へと物語を読み進めていくことになる。そこに描かれているスイミーはすべて右向きである。物語の進行の方向性と、スイミーの向きは一致している。

「左開き」は、横書きの本に見られるもので、縦書きで書かれた本は通常「右開き」である。教科書も当然のことながら「右開き」である。つまり、教科書では読者は右から左へと読み進める。

旧版と新版の違いをもう一度整理すると以下ようになる。

23年度版(旧版)……スイミーは左向き(絵本の絵を反転させている)

27年度版(新版)……スイミーは右向き(絵本そのままの絵を掲載)

新版は、絵本の絵をそのまま掲載している。その意味では、原作により忠実にしたといえる。ちなみに、東京書籍の27年度版「あたらしいこくご 一下」にも「スイミー」が収録されている。こちらも原作に忠実に、右向きのスイミーの絵を載せている。

教科書において、もとの作品を尊重する姿勢がより強くなったこと自体は評価できる。ただ、「スイミー」の場合、問題はそれで終わらないように、私には思えるのである。

前述したように、本が「右開き」か「左開き」かという問題が「スイミー」の場合大きく関係していると考えられるからである。

絵本で、まぐろがやってくる場面を見てみよう。下記の文章が見開き2ページの右上にあり、右向きに大きくまぐろが描かれ、スイミーも仲間の赤い魚たちも右の方向に逃げている。

ところが あるひ、おそろしい まぐろが、おなか すかせて

すごい はやさで、ミサイルみたいに つっこんで きた。

ひとくちで、まぐろは ちいさな あかい さかなたちを、一びき のこらず のみこんだ。

にげたのは スイミーだけ。

*絵本の表記に従った

そしてページをめくると、見開き2ページの右の端の方に一匹だけになって逃げているスイミーの姿が右向きに描かれている。物語自体が左から右のページに向けて進んでいるのだから、読者はスイミーが前のページから逃げてきているとわかる。

新版ではどうなっているか見てみよう。もちろん教科書は絵本と同じではなく、各ページにある

文字の量はぐんと増えている。絵本と同じ絵が用いられているところは次のようになっている。

ある 日、おそろしい まぐろが、おなかを すかせて、すごい はやさで ミサイルみたいに つっこんで きた。

一口で、まぐろは、小さな 赤い 魚たちを、一ぴき のこらず のみこんだ。

にげたのは スイミーだけ。

スイミーは およいだ、くらい 海の そこを。こわかった。さびしかった。とても かなしかった。

文章はこれだけあり、絵本と同じ絵だから、見開き2ページに右向きの大きなまぐろが描かれ、スイミーも仲間の赤い魚たちも右向きに逃げている。そしてページをめくると

けれど、海には、すばらしい ものが いっぱい あった。おもしろい ものを 見る たびに、スイミーは、だんだん 元気を とりもどした。……

と文章があり、くらげを見ている右向きのスイミーの絵が現れる。

新版は、物語の進行とスイミーの向きが一致していないのである。まぐろに追いかけてスイミーは右の方向に逃げていく。ところが、物語は左の方向へと進行するのである。原作に忠実にしたことで、絵の方向と物語の進行の方向が逆向きになってしまったのである。

もちろん、教科書は絵本ではないし、絵本そのままである必要もない。一般論としてはその通りである。ただし、小学校の低学年の段階では、挿し絵は物語の読解と密接に関わっていると私は考える。

*挿し絵の問題をめぐるはこのコラムの第一回「27年度版教科書つれづれ1『大造じいさんとガン』の巻」でも述べているので参照していただきたい。

子どもたちの読解を助け、補うような挿し絵があることが望ましい。「スイミー」の場合、絵本の絵をそのまま持ってきたのだから、絵そのものに問題はない。また、それぞれのページの挿し絵として見る限りにおいては、スイミーがどちらを向いているかということも大きな問題とはならない。

しかし、物語の流れの中で、絵を見ていくなれば、新版の絵の向きは、私にはしっくりこないものが残る。物語の進行と、主人公であるスイミーの進む方向が逆になっているからである。旧版の方が、スイミーの向きと物語の進行の方向が合致していて、私にはよいように思われる。

「スイミー」は子どもたちにとっても魅力的な作品であり、教科書で読むよりも前にもとの絵本を読んでいる子どもも多くいるだろう。また教科書で出会ったことをきっかけに、絵本を読もうとする子どもも多いだろう。そのような絵本を見た子どもたちから、旧版の絵が絵本とは逆向きになっていることを指摘されたのかもしれない。

「先生、教科書の絵、絵本とは反対の向きになっているよ」

こんな子どもたちの指摘も聞こえてきそうさ。

「教科書の絵は、どうして絵本とは反対の向きになっているんだろう？」

そんな問いを子どもたちに投げ返してみると面白かったのではないだろうか。そのことを通して、物語と絵の関係を考えるよいきっかけになったのではないだろうか。

新版は、絵本に忠実に絵を掲載したことで、絵本との違いを指摘する子どもはいないだろう。そのことが少し寂しいように私には感じられる。

最後に、学習の手引きについて述べておきたい。

旧版は「『スイミー』を読んで、かんそうを書こう」、新版も「お話を読んで、かんそうを書こう」で、手引きに関わっては旧版と新版で大きな変更はない。その中で、旧版・新版ともに「はじめ—中—おわり」で「スイミー」の話をまとめる表を出している。そこには次のように書かれている。

「はじめ」 〈「スイミー」のしょうかい〉
「中」 〈できごと〉
「おわり」 〈大きな魚をおい出した〉

物語を「はじめ—中—おわり」という構成でまとめさせようとするにも問題があるのだが、一番気になるのは「おわり」のところが、〈大きな魚をおい出した〉としてあることである。確かに、物語の終わりは「あさの つめたい 水の中を、ひるの かがやく ひかりの中を、みんなは およぎ、大きな 魚を おい出した。」となっている。しかし、「はじめ—中—おわり」という時の「おわり」はある範囲を示す言葉である。「はじめ」が〈「スイミー」のしょうかい〉とあるのに対応するならば、「おわり」は〈その後のスイミー〉とでもなるようなところでなくてはならない。しかしながら、「スイミー」にはそのような場面は存在しない。

私は、「スイミー」の構造を次のように読んでいる。

○冒頭	広い 海の どこかに、……
○発端	ある 日、おそろしい まぐろが、……
○山場のはじまり	その とき、岩かげに スイミーは 見つけた、……
◎ — 最高潮	「ぼくが、目に なるう。」
○結末・終わり	……大きな 魚を おい出した。

「スイミー」には、導入部はあるが、大きな魚を追い出したところで終わっているため、終結部はないのである。「ある 日、おそろしい まぐろが、……」から事件のはじまり、「……大きな 魚を おい出した。」で事件が終わっている（教科書では、「事件」といわず「できごと」といつているが）。強いて「はじめ—中—おわり」という構成で考えるとすれば、「はじめ—中」になっていて「おわり」がないのである。

断っておくが、私は、「はじめ—中—おわり」は、説明的文章の構成を考える時には有効であるが、物語の構成・構造を考えるには有効でないと考えている。手引きの言葉をそのまま用いるという前提での話として理解していただきたい。

教科書は前述したように、

「おわり」 〈大きな魚をおい出した〉

としたことで、大きな魚を追い出したことは、「スイミー」の〈できごと〉には含まれないことに

なる。しかし、それはおかしい話だろう。

導入部、終結部がはっきりとわかる作品ならまだしも、「スイミー」のような作品を「はじめ—中—おわり」でとらえさせること自体に無理がある。なおかつ、もう一度述べるが「はじめ—中—おわり」は物語の構成を捉えていく上において有効ではない。光村図書の小学校 27 年度版教科書においてすら、これ以降もこれ以前でも物語を「はじめ—中—おわり」でとらえたものは「スイミー」だけしかない。小学 3 年（上）の「もうすぐ雨に」で、「始まり—出来事が起こる—出来事がへんかする—むすび」という物語の「組み立て（流れ）」があることを説明している。これが唯一「はじめ—中—おわり」に一番近い説明だが、用いている用語も微妙に異なっているし、「もうすぐ雨に」は明確な終結部を持った作品でもある。つまり、光村図書の小学 1 年～6 年までを通してみるだけでも、「はじめ—中—おわり」が物語の構成を読みとる上で有効性をもたないことは明らかなのである。

『小学校・中学校 学習指導要領解説 国語編』で「学習の系統性の重視」として次のように述べている。

国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている。

「スイミー」における「はじめ—中—おわり」という説明が、物語の系統性を考えたものになっていないことは、先に見たことから明白であろう。

「はじめ—中—おわり」の形に無理やり当てはめるのではなく、どのような〈できごと〉があったか、時間の順序でまとめさせる方がまだしも混乱はないであろう。現に、小学 2 年（下）の物語「わたしはおねえさん」（いしいむつみ）では、次のように説明している。

じんぶつがしたことや、できごとを中心に、お話をみじかくまとめたものを、**あらすじ**といいます。じんぶつがしたことを、お話のじゅんに、みじかくまとめてつなげると、あらすじになります。

同じ 2 年生の教科書であり、「スイミー」のてびきが「わたしはおねえさん」につながるようにした方が、ずっとわかりやすいものとなる。残念ながら、それだけのことが出来ていない。